

北海道支部研究発表会事始め

北大名誉教授 小 島 賢 治

雪氷 26 巻 3 号 (1964) p.100~102 に掲載された北海道支部だよりの最後の半ページに次のような記事がある。

「支部研究発表会、2 月 8 日 (土) 午前 9 時半~12 時、於北大低温科学研究所会議室。

北海道支部に属する会員の中で、全国大会に出席できぬ人が研究発表を行う会という趣旨で、昭和 38 年度に初めて計画された。しかし、この趣旨に沿う発表希望者は皆無で、結局、世話人の懇請を下記の数名の方が受理され、研究の一端を披れきされる形となった。当年度の行事のうちで最も多数の参加者があった天気図ならびに積雪観測法講習会の翌日に行われたためか、研究発表会参加者の数は 40 名を下らなかった。研究発表講演要旨は別に掲げる (p.28~30)。(なお次年度の支部研究発表会は別の型式で行なうことになっている。)

発表題目・氏名 (原文の一部を省略)、1. 積雪結晶組織の不連続面における抗剪力。(北大低温研) 小島賢治、2. しもざらめ雪の研究 I。(北大低) 秋田谷英次、3. 降雪の総合観測。(北大理、地物) 李・孫野、4. スノークリスタルゾンデの試作。(北大理、地物) 田沢・孫野、5. 降雪強度計の一案とその利用について。(札幌管区气象台) 井上力太、6. 北海道の暖房デグリー・デー。(札幌管区气象台) 日下部正雄、7. 昭和基地 (69°S) から 75°S までの重力測定値から推定される大陸氷の厚さ。(北大低) 大浦浩文、8. 昭和基地付近の雪氷を融解して得られた水の電気抵抗。(北大低) 大浦浩文、9. 今冬の札幌における積雪断面測定 (中間報告)。(北大低) 小島他」

さいわい、上記の 9 件の講演でなんとか体裁を整えることができた。これが北海道支部研究発表会の始まりである。世話人とは当時支部幹事長であった私のことであり、支部だよりも実は私が書いたものである。発表会では、「隗 (かい) より始めよ」というわけで私自身が前座をつとめるはめになったのは止むを得ない。私が発表した材料は 4 年も前の 1960 年 2 月に母子里で測定したもの*である。その間の 3 冬期間を含む 2 年余り私は外国でデスクワーク (資料解析と論文書き) に明け暮れていた。「現在昭和何年か」を思い出すのに数秒かかる状態で札幌に戻って間もなく、支部幹事長の役目を木下誠一さんから引きついだので、なにかにつけて大変苦労した。私になじみの薄い他の研究機関の人に講演を頼むのに吉田支部長が同行して下さったり、地方談話会の打合わせに国鉄の関係者が現地へ一緒に行って下さったり、私の不馴れを見かねて助けて下さった方々の御親切は忘れられない。初回の研究発表会でも私のお願いを受理された日下部さんは、当時札幌管区气象台技術部長で支部理事でもあったが、講演あるいは学会誌雪氷への投稿などの度重なるお願いを気軽に大抵引受けて下さったことはまことに有難かった。

ところで、研究発表会はその後どうなったか。私の幹事長 2 年目の行事に組入れるのは止めてしまった。その代り次年度の初日、1965 年 6 月 17 日の総会・講演会にひきつづき、当日の午後に雪氷一般の研究発表 7 件、さらに翌 18 日にも植物の寒害についての研究発表 16 件と 2 年度分の研究発表会を盛大に挙行し、参加者も倍増した。支部幹事長はこの総会で私から若濱さんに引きつがれた (雪氷、27 巻、4 号、1965)。現在行われている「総会につづく研究発表会」の形はこの時に始まったわけである。

私自身は支部での研究発表を 20 年以上怠けるようになり、1987 年から再び心を入れかえて登場したが、今年は稀にみる暖冬と支部 30 周年を記念して（という勝手な言訳で）休みとし、古い昔の写真やら昔話を提供してお茶を濁した次第である。

＊ 注：最初の研究発表での私の話の要旨は雪氷に掲載済みであるが、測定値の記述がなかったので、ここで少々補足できればと思う。表題に組織の不連続面とあるのは、いわゆる弱層の一種である。注目したのは（a）積雪上部の新雪～こしまり雪の中に介在する特に密度が小さい薄層（厚さ 1 cm 以下）で、樹枝状ないしこれに近い形の結晶からなる部分と、（b）組織の粗さが違う 2 つの層、たとえばしまり雪とざらめ雪の境界面などである。（a）の場合、雪面から深さ 30 cm（水量で約 45 mm）までにあった 3 枚の弱層の抗剪力の平均は、それらの上下の一樣層の抗剪力の平均 $600 \text{ kg} \cdot \text{m}^{-2}$ の 38% であったが、これより深い所にあった低密度層からは、さほど明らかな弱さが得られなかった。（b）の 1 例として、密度 $350 \text{ kg} \cdot \text{m}^{-3}$ のざらめ雪と、その上に測定時の 2 日前に積った密度 $200 \text{ kg} \cdot \text{m}^{-3}$ のこしまり雪との境界面の抗剪力は、こしまり雪内部の抗剪力 $800 \text{ kg} \cdot \text{m}^{-2}$ の半分であった。しかし、もっと古いしまり雪とざらめ雪との界面では、抗剪力が必ずしも小さいとは言い難かった。なお、測定方法は雪氷掲載の要旨に述べてある。雪試料の温度は $-2 \sim -4^\circ\text{C}$ であった。